

第 11 回事故対策会議 報告

労山大阪府連教育遭対部長 中川和道 20160126

第 11 回事故対策会議が 1 月 26 日(火)に開催され、14 の会から 36 名(末尾注参照)が参加され活発な討論が行われた。事故対策会議は、事故の当事者や当事者に近い責任者が一堂に会して経験を語り合い教訓を探しあうことによって事故を減らしていく会合で、事故当事者の不明や欠点を攻撃する 吊るし上げ的な会議ではなく同じ場面に自分が立ったとき事故を避ける判断の分岐点がどこにあったのかというヒントを探り教訓を学びあう会議である。

当日は大阪労山ニュース 2016 年 3 月号の事故一覧の No. 8 から No. 12 のレポートに基づいた報告のあと、ひとつずつ順に議論していった。以下、順に概略を述べる。

No. 12 山の会ロッキーの 2 人パーティー。12 月 20 日(日)日帰りで台高山脈大又林道→明神平→伊勢辻山→林道駐車場の登山中、15 時 10 分、伊勢辻山から駐車場への下山時に急斜面で足を滑らせて滑落し左大腿部を打撲。自力下山不可能とみてその場に待機(ツェルトかぶりホッカイロで暖)。同行者が下山して消防に 16 時救助要請。21:52 救助隊到着。痛みをこらえつつ救助隊に付き添われて 21 日 1:20 駐車場に下山。21 日精密検査。左大腿部打撲(内出血)で通院治療。17 名が動いた救助費用を地元で照会したが費用なしとのことで幸運であった。会からは 6 ページにわたるていねいなレポートが提出され概要の報告があった。以下、議論をまとめる。

(1)ルートを選択：今回は一般登山道でも難路でもなくヤマレコでのみ報告があるルート(会報告書では「バリエーションルート」)を選択したことが大きな要因、1 本道の尾根下りとヤマレコ地図を読み間違い尾根分岐点で右の尾根に入ってしまった、テープがあったのでそれを信用したが後の情報では救助隊が自分たちのために以前つけたテープで一般登山道のマークではなかった、どんどん困難な下山となりついに滑落したとのこと。ヤマレコの中には困難さのみを競う登録もあるようで毒と美食が混在しているので注意すべき、テープには危険路の調査、送電鉄塔管理、ガケ崩れの調査、仕事道など登山以外のテープも存在するので登山路だと勘違いしてはいけない、ケルンがあるので行ってみたらガケだから来るな危険と書いてあったなど他人の山行記録をよく読もう、などの議論があった。(2)大腿部打撲で行動不可能と判断しツェルトをかぶりホッカイロで暖をとってその場に待機したのは良かった、日頃の備えの成果。(3)会としての対応：事故連絡体制・山行技術部(仮称)の構築など真剣な対応が取られそうであり期待したいとの発言があった。(4)会報告書に基づいて、大阪府連救助隊が出動待機態勢に入って下さったことに対するお詫びが述べられたのに対し、救助隊員の方から「互助組織である。」との心強



事故対策会議の様子

い言葉をいただき一同感銘を受けた。(5)地元の救助隊 17 名が動いて下さったことに対し感謝とともに謝礼の問合せがあった。林孝治事務局長の情報をもとに略記すると、[1]地元では遭難対策協議会(警察, 消防, 山岳団体など)があり救助や捜索の実務を行う。[2]警察署員・消防署員など公務員の出勤は業務の範囲内なので日当謝礼は受け取らない。公務員以外の消防団員や山岳団体の役員など公務員でない方々の出勤には日当が必要で例えば長野遭対協では遭対協の要請での出勤の日当は昼間で一人あたり 25000 円。[3]救助終了時に「日当請求を近日中にいたします」と告げられることが多い。不明な場合は市長村役場などに問合せる。[5]労山特別基金は捜索費用もカバーしている。[6]費用不明でも基金申請不明でも、事故一報はまず出すことが必要。本人が書くのではなく会で出すのがよい。

この事故は、中川が知る限り大阪府連初のヤマレコ誘発事故であるようだ。関係者は、ヤマレコの使い方を大いに宣伝してほしい。

中川注：『登山時報』2016 年 3 月号 32 ページによれば、「登山地図で破線や仕事道、やぶ漕ぎがあるような場合は新特別基金交付の細則 3『交付の特典』の対象から外れる」という。今後の山行計画の参考にさせていただきたい。

No. 10 11 月 15 日 14 時 30 分 岩登り体験教室 YS(男)59 福島勤労者山岳会 蓬莱峡大屏風岩大根おろしルートをリード中、ホールドが砕けたため 3m ほど下のバンドに下半身から墜落。道路まで歩き救急車で搬送され、第 1 腰椎椎体の圧迫骨折と診断。痛みやしびれなどの自覚症状はなく、翌日退院。1 週間後にギプス完成。運動を控え、気をつけて経過観察中。

4 ページの報告書にもとづいて報告をいただいた後に議論したが、多くの参加者が理解できず、報告書を改善していただき、次回に持ち越すことになった。

No. 8 8 月 24 日 9 時 50 分 安治川山の会 SK (男) 71 南アルプス悪沢岳

2 人パーティーで 8/22 夕刻に畑薙第 1 ダムに入山。8/23 榎島ロッジ 8 時から千枚小屋着 17 時。8/24 千枚小屋 5:17 発、悪沢岳山頂を 9:30 頃出発。中岳方面にコルに向かって約 20 分下ったコルの手前で転・滑落。左手の本谷側 50~60m で止まったが動けず。同行者が他の登山者にコール。悪沢岳山頂にいた NHK の撮影隊 10 人弱? の協力のもと事故者を尾根上に移動。事故者のザックは行方不明のため放棄。静岡県防災ヘリで 12 時すぎピックアップ。静岡県立総合病院に 12:45 に搬送入院。8/27 大阪に移送。10/9 退院。第一脊椎圧迫骨折。顔面の切傷・打撲傷多数。眉間を数針縫合。8/27 現在頭部異常なし。4 ページの報告書をもとに報告の後に議論。議論は以下のとおり。

(1)直接原因：転・滑落の瞬間の記憶がなく直接原因は不明との会の報告。日程もさほど問題なし、山行歴も問題なしとの会の報告。年齢から推察するといわゆる「事故がおきやすい魔の時間、10 時頃と 14 時頃」との疲労感があったかとの質問も出されたが、本人に特に自覚はなく同行者も気づかなかったとのこと。歩行を助けるストックの使用の質問も出たが「2 本使用していた。事故の瞬間は覚えていない」とのことで、議論は止まった。(2)他の会から「今回は千枚岳の下りが危険で次の悪沢岳下りはそれよりは危険度が小さい。大危険の次の小危険で事故が起きたくやしい体験をしており他の会でも同じ。思い当たることはないか?」との指摘に「本人としては『子

供でも行ける場所』と認識した。なぜ落ちたかわからない」とのことで議論は再びとまった。(3)他の意見として、近年は縦走でもヘルメット着用が推奨されることなども出された。(4)リーダーSKさんのヘリ搬送後、同行者が山行を管理できずNHKの方々につき添って下山させていただいた。そのさい、自分では山行管理できずリーダーへの依存度が高すぎることを、事故者をブッシュから引き降ろすさいいかにも危険そうに見えたなどにNHKの方々からつよく指摘されたことが報告された。(5)会ではリーダーは事故を絶対起こさないという自覚を高めるとの方策が示された。

事故対策会議では、会の事故克服の方策をさらに学びたかったが、会での議論不十分さが感じられる結末となった。安治川山の会での議論が今後いっそう深まり、同じ事故を2度と起こさないことを教育遭対部長として切に望む。

No. 9 10月18日13時45分 H.C.MONTES AK(女) ダイヤモンドトレイル縦走大会、40kmコースの35km付近の紀見峠へ向かう長い階段をおりた緩やかな下り道を歩いていた。木の根に足をとられ左足を外側へひねってしまった。転倒もなく、その時は痛みも我慢できる状態であったため、持参していた鎮痛剤を付けながら下山してきた。帰宅後、腫れがひどくなったので、病院にて診察を受けたら骨にヒビが入っていた。傷病名；左足腓骨の下部くるぶしの骨折。1ページのレポートをもとに下記の議論。

(1)それなりのトレーニングを積んだ中でのトレイルランの事故。トレランシューズは足首の保持が弱いので足をテーピングで固定するなどの予防策をとる人もいる。今回も消炎スプレーやリカバリーソックスなどを持参してのトライだった。などの報告を受け、注意喚起をとる意見が強かった。(2)労山特別基金のトレラン事故カバー状況は、登山時報2016年2月号33ページおよびOWAFメーリングリスト[owaf:5604]2016/02/09の林孝治事務局長の記事参照：「トレイルラン：競技大会は対象外。山での練習中の場合は、計画書が提出されていれば認定」。

No. 11 9月21日11時00分 山の会テンション MN(女) 42 南アルプス 荒川三山 赤石岳
3人パーティーで9/19 昼過ぎ榎島ロッジ着、9/20 榎島ロッジ発 6:06、千枚小屋テント着 12:20、9/21 千枚小屋テントサイト発 5:28、荒川小屋手前を歩行中 11:00 頃、左斜面に左足をとられ滑落しそうになったので右足で踏ん張った。その結果右足首に違和感があり腫れが生じた。湿布・テーピングをした。歩行はできたため山行はそのまま継続し赤石小屋到着 18:00 頃、小屋泊、9/22 赤石小屋発 5:27、榎島ロッジ着 9:40、バスの待ち時間約40分の後バスに乗り、バスで移動し畑薙第1ダム下山 11:30、タクシーで移動し(途中:銭湯にて下車)路線バスにて静岡駅着 16:00 頃、夕食などの後大阪行夜行バスに乗り静岡駅発 22:55、そのままバスで9/23 未明帰阪。傷病名：右足首骨折(剥離骨折)。4ページのレポートをもとにした議論は下記のとおり。

(1)直接原因はポケット内の筆記具が足に刺さるので歩きながらポケットを触ろうとして意識がそちらに移り足元がおろそかになった典型的な不注意。ケガの程度がもしもっと重いか小屋からずっと遠いか条件が悪ければまずい状況になった可能性も指摘されるとのレポートに一同納得。単独行なら直ちに立ち止まれる。ちょっと止まってくれと言えるパーティーを維持することが重要との発言もなされた。(2)当日のレポートの事故発生日は22日とされたが事故一報では21

日に事故発生とあり、さらに「18日から23日の・・・」とあったので5泊6日の超長期山行かとも思われたが本人欠席のため真相不明となった。後日の調査で実は3泊4日の山行と判明、当日のレポートの内容で妥当との感触であった。出来るだけ本人の出席が望まれる。

ここで、事故対策会議に向けて各会に期待することを書いておく。会からご準備いただくレポート作成の参考にさせていただければ幸いです。

事故対策会議の第1の目的は、事故発生と同じ場面に自分が立ったとき、事故を避ける判断の分岐点がどこにあったのかというヒントを探り教訓を学びあうことである。状況が全員の目に浮かぶようなプレゼンをお願いしたい。これまで、本人が来られず会長さんや事故防止担当者が来てくださったものの、右に落ちたのか左に落ちたのかがぱっと答えられなくて地図もなく登りか下りかも答えられず、やむなく出席者全員で文章の解説をしつつ黒板に地図を書き状況把握をしたことがあって会場から不満の声が出たことがある。そこで、事故のご当事者などのご出席をお願いすることになってきた。この「状況の発表」は普通にご準備いただければ5分もあれば充分だと思われる。

事故対策会議の第2の目的は、会でのご討議を経て得られた「2度と起こさない方策」を他の会にも教え広めていただくことで、こっちの方が重要である。方策について15分かけてゆっくりご発表いただけるような資料を作っていただければ幸いです。

そのさい、会でよく議論していただくことが前提だ。本人が書いた報告書を会での吟味が不十分なままご提出いただくのはいかなものか。事故の当事者はただでさえ心が落ち着かない。当事者に寄り添いつつ、「あんたは今、大変だ。客観的な分析は我々もがんばるし我々が書いてあげるから」という話になってほしい。会の事故総括能力が低下しているのではないだろうか。

過去の事故対策会議第1回から第10回は、第1回(2011/3/5)、第2回(2011/11/8)、第3回(2012/2/29)、第4回(2012/5/28)、第5回(2013/2/27)、第6回(2013/9/5)、第7回(2014/3/4)、第8回(2014/8/21)、第9回(2015/3/12)、第10回(2015/8/27)に開催され、そのまとめは「大阪労山ニュース」2011年4月号、2011年12月号、2012年4月号、2012年7月号、2013年5月号、2013年11月号、2014年5月号、2014年10月号、2015年5月号、2015年11月号に掲載されています。大阪労山のホームページから

<http://www.geocities.co.jp/Athlete/3063/kikanshi.htm> へとたどってぜひお読み下さい。

参加のクラブ 豊中労山(5) 山の会ロッキー(4) 安治川山の会(4) きたろうハイキングクラブ(4) 福島労山(3) OWCC(3) 泉州労山(2) 山の会テンション(2) H.C.MONTES(2) 大阪志峰会(1) 吹田労山(1) カランクルン(1) H.C.げんごろう(1) 大阪ぼっほ会(1) 常任(2) 計36名